



2015・11・21

第 222 号

101-0065 東京都千代田区  
西神田 2-5-7 神田中央ビル 303

TEL 03-3221-5075

FAX 03-3221-5076

## 今一度 すべての地域、すべての人に働きかけを

### 運動強化へ 呼びかけ人会議

11月13日、「九条の会講演会」に先立って、大江健三郎、澤地久枝の2人の呼びかけ人が参加する会議が開かれ、この間の戦争法反対の運動の感想を出し合いながら、戦争法廃止をめざす今後の運動の強化に向けて、別項のアピール発表を決めました。

また、九条の会の態勢を強化するため、運営委員会(仮称)を設置することを決め、具体化の論議に入ることとしました。

### <アピール>

#### 憲法9条を守るために新たな飛躍を

いま、日本国憲法は重大な岐路に立っています。安倍晋三政権と与党は、9月19日に戦争法(安全保障関連法)の採決を強行し、憲法9条の体制を大きく掘り崩すという暴挙に出ました。この動きに対し、「憲法9条を守れ」、「立憲主義を壊すな」など、多くの人びとが反対の意思を示し、運動の輪が大きく広がりました。この盛り上がりは、「日本が戦争することは許さない」という決意を込めて制定された憲法9条が人びとの中に強く息づいていることを改めて証明しました。しかし、安倍首相は、その後

も、戦争法の発動に執念を燃やし、9条改憲になお意欲を示しています。結成以来11年、「地域に根ざす」、「共同を広げる」という原点を大事に歩んできた「九条の会」には、戦争法反対に示された声に応じて、9条改憲を阻むための運動を新たに飛躍させることが求められています。

全国津々浦々から、戦争法廃止の声をあげましょう。

戦争法と一体の辺野古新基地建設に反対し、オール沖縄の声を踏みにじるな、の声をあげましょう。

憲法9条の「武力によらない平和」の理念をくつがえす明文改憲の動きを阻むために立ち上がりましょう。

この間、戦争法反対に取り組んできた、地域、分野の「九条の会」のみなさんに改めて訴えます。

戦争法反対運動では安保闘争以来といわれる多くの人びとが創意工夫をこらしてさまざまな行動に立ち上がりました。6割に及ぶ人びとが戦争法案に反対し、8割を占める人びとが法案の説明が不十分だと感じています。憲法9条違反の戦争法を廃止すると

いう課題を目の前にして、今一度すべての地域のすべてのひとを対象に宣伝し、学習会を開きましょう。

そして、戦争法反対運動でつちかった共同の輪から生まれた結びつきを活かしながら、各地域、各分野でさらに広げる努力を粘り強くすすめていきましょう。近隣の会同士で互いに支え合い、交流することで運動の活性化を図ることも重要です。

「戦争法廃止」の署名運動や沖縄での新基地建設反対運動など、「憲法9条を守る」という点からも重要な運動に積極的に取り組みましょう。地域で開かれるこれらの集会には、「九条の会」としてもできるだけ多数で参加しましょう。

日本と世界の平和な未来のために、日本国憲法を守るという一点で手をつなぎ、「改憲」のくわだてを阻むため、一人ひとりができる、あらゆる努力を、いまずぐ始めることを訴えます。

2015年11月13日 九条の会

## 鶴見さんの志受けつぐ決意固めあう 「九条の会講演会」開く

九条の会が主催する「鶴見俊輔さんの志を受けついで 九条の会講演会—今、立憲主義と9条の危機に立ち向かう」が11月13日、東京千代田区の日本教育会館一ツ橋ホールで開かれ、750人が参加しました。集会では、ゲストの益川敏英さん、森まゆみさんと、呼びかけ人の澤地久枝さん、大江健三郎さんの4人が講演、鶴見俊輔さんの妻・貞子さんがあいさつをしました。(以下の講演は要旨。文責は編集部にあります)

## <京都大学名誉教授>

### 益川 敏英

鶴見俊輔先生をこの次期に失ったということは非常に大きな痛手であると思っています。9条に関しては一大決戦が待っているわけです。その先頭に、是非先生に立っていただきたかったのですが、それもならぬ話になってしまいました。

私事になりますが、私が「鶴見」というお名前をいちばん最初に耳にしたのが、1960年の1年前の大学2年のときで、少しづつ60年安保に向けて緊張が高まりつつあったときです。ただ、その下についている名前は俊輔さんではなくてお姉さんの和子さんです。彼女が夜の10時に20分ぐらいのコラムをもっておられて、それが実に筋の通ったいい話で、ずっと聞いていました。

俊輔先生のこと非常に強く印象に残っているのは、『思想の科学』という雑誌によつてです。それを本屋さんで立ち読みして、面白いのがあれば買うということで鶴見先生を少しずつ認識していったわけです。

鶴見先生は戦前、アメリカで生活されていた。戦争が激しくなると、隔離地域にいられたが、1942年に日米の国民の交換で鶴見先生は日本に送還された。日本に帰って来てハッピーだったかということ、そうじゃないんですね。アメリカで長いこと生活し、英語をしゃべっていたということで、日本ではかなり迫害された。

そういうことで鍛えられたのだと思いますが、鶴見先生は立ち位置がぶれない、筋道のとおった論理を展開される方だと認識していました。

鶴見先生は立ち位置がぶれない。これはすごいことで、私は先生の立ち位置を見て自分の立ち位置を修正することをやってみました。私にとって鶴見先生は心の恩師と言えると思います。

私自身が九条科学者の会に入ったときも、お誘いいただいたとき、なんと言ったかという、「みなさんの足手まといにならないように最後尾を歩いていきます」。そのくらいの認識だったのです。しかし、昨今の政治状況を見ていると、そんな悠長なことを言っていていいのか、少なくとも後ろから3番目くらいのところを歩かなければならぬ——京都科学者九条の会の会長を引き受けることになりました。

そういう私ですが、立ち位置がぶれないということはどういうことなのか、ということなどを常々考えています。私などは結構立ち位置がぶれてしまう。立ち位置がぶれないということは、そういう政治的信条のようなものが、骨肉になっているということなんでしょうね。目をつむっていてもその通りに歩ける、そういうところまで思想になっているということだと思います。鶴見先生はそういうことを体現された方だと思います。

これから日本において何が起るかといったときに、安倍晋三首相は、日本国憲法があるにもかかわらず、戦争ができると言っているのです。私は「六法全書」をもってきて読んでみましたが、そんなふうには絶対読めない。それどころか憲法の前文を読むと、平明な言葉だけでも、涙が出てくるほど美しい。そこにはどういうことが書いてあるか。戦争を放棄し、集団的自衛権を

禁止するというようなことが書いてある。そう言うと、相手が攻撃してきたらどうするんだということが反対論者から出てきます。それに対して憲法前文にはちゃんとした回答が書いてある。「国際的な信義によってわれわれは守られるであろう」と。私はそのとおりだと思います。丸腰でいたらやられちゃうというのですが、それは1対1のケンカを想定しているからで、いま地球上には190ぐらいの国があります。紛争当事国になったときに、その数カ国と利害関係がない第三者的な国が100以上あります。それらが戦争をしている国にたいして、どちらの言い分が正しいということ判断してくれるはずで、これは憲法の前文に書いてある。国際的な信義によって守られるということが書いてある。

私はこのことを真理だと思っています。考えてみてください。虫も殺さないような性格のおとなしい方が、戦争に行くと銃眼でのぞいて、相手の表情がわかるような状況で引き金を引く。戦争に行った方にとって、それはあまり語りたくないことであり、心の中に大きな傷として残っているはずで、そんな残酷なことを国が命ずる権利はないと思います。

私も臆病ですから、戦争は嫌いです。

## <作家>

### 森 まゆみ

1984年から26年間、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（『谷根千』）を出してきました。大所高所ではなく小所低所にこだわり、普通の人の生死を記録してきました。鶴見さんと初めてお会いしたのは、この『谷根

千』をご覧になって『思想の科学』の雑誌特集で対談させていただいた時です。

私たちは、町を歩いて出会う人ごとに町の歴史、個人の歴史を聞いてきました。「幼児の砂いじり」と言われたこともありました。皆で聞き、原稿をおこし、読み合わせて作っていく、こういう効率の非常に悪いことをやっていたのですが、「行政に紹介してもらえば」とか、「町会長から順番に聞けば」ということも言われましたが、そういうトップ・ダウンのことはやりたくなかったのです。町のどこに傘の骨接ぎ屋があるとか、下駄の鼻緒をすげ替えてくれるところはあるか、まな板や包丁を研いでいる職人さんはいるとか、そういうのを探して『谷根千』で紹介しました。

個人的に雑誌を始めてみて、雑誌をつくるのがどんなに大変かを思い知りました。企画をし、原稿を頼み、なかなか書いてくれない人から原稿を集め、広告をとり、インタビューをし、レイアウトをし、イラストを入れ、校正をして、版下をつくり、それを印刷してもらい、ようやく雑誌ができあがります。これを配達し、集金してお金を銀行に入れる。売れなかったら悲惨です。

『思想の科学』が50年続いたというのは、どのくらい大変だったか、どのくらいお金がかかったかと、つくづく感じます。

『思想の科学』の50年、それを場としてのベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）、九条の会の活動は戦後の日本の思想史、社会史に大きな影響を与えたと思っています。

あるとき、「森さんのキーパーソンという言葉の使い方を市井三郎が聞いたら喜ぶよ」といわれました。根津の藍染通りのキ

ーパーソンとして、町の潤滑油であり隠れたモラルを形成しておられるような方をとりあげた時のことでした。その時私は、「根津の町の人たちは、住んでいる通りに、魚屋、米屋、八百屋となんでもあるので、ほかのところのことは『知っちゃいない』というところがある」と書きました。そして鶴見さんは、「そこがいいんだ。この町以外のことは『知っちゃいない』、それが国家から自由になる道だ」とおっしゃいました。

大正の大震災後、28歳で権力にくびり殺された伊藤野枝に「無政府の真実」という評論があります。かいつまむと、無政府というのは不可能だという人もいるが、自分の故郷の村—福岡県糸島郡の海辺の村には駐在もいなければ役所もない。でも揉め事がおきれば長老たちが集まって解決してしまう。ある場合には村八分にす、夫を失った人がいればその生活の道をみんなで考える、障害をもった子どもがいても共同体の中に抱えていく。国家権力が出る幕がない、と伊藤野枝は書いています。国家がなくとも私たち生きていけるんです。

人間は偉くなればなるほど、戦争にまきこまれやすい。先の戦争でも市川房枝、平塚らいてう、林芙美子、吉屋信子といった婦人運動の指導者や名のある作家たちが戦争協力をしました。ああならない方法はあるか、それは出来るだけ目立たないことです。ほめられもせず、苦にもされず、町の中で生きていく、それを「貧楽」—貧しいけれど楽しい暮らし、と私は名付けました。

そういう国家に関係なく生きていく道を私も探りたいと思います。ただ、自分だけが国を捨てて逃げるといふわけにはいきま

せん。生きていれば戸籍や納税義務もあり、子どもが生まれれば教育の義務や予防注射もあります。マイナンバー制度も始まってしまいました。生まれ育った土地を離れる自由は、そうありません。いま安倍政権は日本を戦争できる国にしようとしています。私もここにとどまって闘いつづける方を選ぶでしょう。でもその闘い方はできるだけ、自由で余裕のあるものでありたい。

私は鶴見さんの本のなかでも『アメノウズメ伝』という本が好きです。美人ではないけれども闊達で自由な女性の力、こわばった権威的な場を壊す笑いをさそう力、それを鶴見さんは書いておられます。こうした考え、感じ方をする人がますます少なくなっているように思います。

この2年、私は神宮外苑のオリンピックを目指す新国立競技場計画に反対し、森を守り、前の競技場を改装して使おうと提案してきました。8万人近くの署名を集めたのに競技場は壊されましたが、コストに対する国民の反発もあって、この計画は白紙撤回されました。国家プロジェクトが市民の運動や専門家の異論によって撤回された例はまずない。画期的なことだと思います。ただ、官僚たちは前の計画とそうかわらないサイズのスタジアムを作ろうとしています。スタジアム建設を口実に、周辺の高さ規制の後追い緩和や都営住宅の住民の追い出し、そして貴重な緑地を馳文化相の言うように「にぎわいのあるスポーツ特区」にするというのはとんでもない話です。日本には民主主義は形だけあるけれども、いくら提言や要望をもっていても政府は聞く気はありません。そういう人たちを相手に

知恵比べするときには、アメノウズメのように時に笑ったり、踊ったり、からかったり、フェイントをかけたりと、心が遊ぶことが大事だと鶴見さんはおっしゃいました。

鶴見さんと最後にお会いしたのは2010年秋です。その時、鶴見さんは、「これからの世界はエクストリームリー・ローカルが重要」と何度も繰り返しました。これは、自分のいるところに深く依拠し、自分の流儀で生きることではないかと思います。

憲法でそれ考えるとどうなるか。まず、国民、住民のためにならないものはやめてもらいたい。年に40日しか使わない巨大な競技場はいりません。リニア新幹線もいりません。安保関連法ももちろんいりません。

私は地域雑誌をつくるなかで何百回となく聞きました。戦争中、中学受験で帰ってきた6年生が谷中ではたくさん亡くなった。ご両親が死んで自分は防空壕で餓死した子どももいます。そういう話を聞いているうちに、戦後生まれの私も、戦争を体験したような気持ちになってしまいました。戦争が始まってしまえば、拒否することはできません。鶴見さんは根津には根津の道があるとおっしゃいましたが、私も「エクストリームリー・ローカル」という言葉を抱きしめ、私たちの暮らしを壊すものとたたかい続けていきたいと思っています。

## <作家>

### 澤地久枝

私が鶴見俊輔さんと知り合いになったのは60年以上も前のことです。私は20年代の前半で、俊輔さんは30になるかならないかという頃です。鶴見さんのご姉弟を呼ぶ

ときに、和子さんとか俊輔さんといつも言ってきましたので、今日も俊輔さんと呼ばせていただきます。

俊輔さんは、93年という長い時間を立派に生きられたと思います。最後のご闘病は非常にお苦しかったと思いますが、じっと耐えて、掲げている小さな旗を引っ込めることはなかった。俊輔さんは交換船で帰ってきた後、ちょうど20歳になってしまって徴兵検査を受けさせられ、いつ召集されるかわからない状況になったときに、まだ陸軍よりは海軍のほうがいくらかましだろうとお考えになって海軍にいらして、いまのインドネシアで勤務されていた。

その俊輔さんは、自分の隣の部屋の住人が、住民を銃殺することを命じられて非常に苦しんでいるのを見て、自分にそういう命令がきたらどうするかを考えていらした。「殺されても殺すことなかれ」というのが俊輔さんの信念だったのです。

その頃、俊輔さんをささえていた一人の詩人がいたことを、私は亡くなられてから知りました。イギリスのウィルフレッド・オーエンという詩人です。第1次世界大戦が終わる1週間前に亡くなったこの人が残した文章の中に「殺されても殺すなかれ」という示唆に富んだ言葉があります。私は鶴見さんが彼に心酔していて「私の心のささえだった」と書いていらっしゃることを亡くなるまで知りませんでした。私もウィルフレッド・オーエンという人をとても好きです。

鶴見さんがどんなに立派な哲学者であったかは皆さんの方がご存知ですが、『思想の科学』という雑誌を50年続けていらして、

執筆者はいろいろです。明らかに右反動といたいような人もいるのですが、鶴見さんは人の名前をあげるときには必ずその人の名前もあげる、そういう公平な方でした。

俊輔さんは九条の会の中心として、いろいろな方が亡くなっていくなか、いつもりんとした姿勢を保っていました。私は小田実さんが亡くなってご家族が生活にお困りになるのではないかと心配したのですが、俊輔さんは、亡くなって話さない小田さんとの対談集を岩波書店から出されています。

俊輔さんのいろいろなことに通じていらしたし、プラグマティズムの思想の源流を築いた人たちにハーバード大学で教えを請うたという、私からみれば非常に珍しい方でした。その俊輔さんのもっていらっしゃるいろいろな経験、知恵のおこぼれに私はあずかって生きてきたような気がいたします。でも今日はここに立つ以上、もっと他のことを話さなければ俊輔さんに叱られると思います。

俊輔さんは笑うことはいいことだとおっしゃって、そしてよく笑われました。でも今は、怖い顔をして安倍内閣に異議申し立てをしなければならぬ時だと思います。

昨日、安倍さんは初めて9条には反対だといいました。いままでは追及されるのらりくらりと逃げていたのですが。その安倍さんによって日本はなしくずしのうちに戦争のできる国へと、変えられました。9月18日の夜中、日付でいったら19日ですが、9月18日というのは関東軍の現役の軍人たちが、満州事変を陰謀で始めた日です。その日に強行採決するとは、歴史を知らないおそるべき人だと思います。9・18といえ

中国人たちはすぐ反応します。しかし日本では70年たったといいながら、その日を期して、しかも真夜中に強行する、私はあってはならないことだと思います。

益川先生もおっしゃったように、憲法9条、前文は、実に美しい理想的な言葉です。そこから出てきた答は、日本は陸海空の軍事力を一切もたないことと、交戦権は行使しないということです。でも安倍さん、もうこの条文は無いに等しい、まだそんなことを言っているのかと思っています。

私たちは、1947年の施行以来一度も変えられていない憲法の精神に戻っていくための努力をしなければならないと思います。全国のいろいろなところで皆さんがいろいろな会をしていらっしゃる。訪れるとどれほど真剣に皆さんがこのことを考えているか、努力していらっしゃるかわかりますが、それを一切無視しているのが安倍政治です。

安倍政治を私たちは許してはならない。

そのためにどうしたらいいか。私にはただちにこの方法と言えません。しかし、自衛隊は何と強大な軍隊になってしまったのでしょうか。アメリカと同盟を組んで、どこへでも出ていこうとしています。でも戦争をしかけて勝った国はありません。それから私たち日本人にとって、そして日本を囲んでいる国々にとって、戦争は無意味です。いまこそ本当に皆が武力を捨てて、平和のために力を合わせていくべき時だと思います。

九条の会の呼びかけ人は3人だけが残っています。これからも、みなさんと一緒に、安倍政治を許さない、9条の原点に戻っていく努力を続けていきたいと思っています。

## <作家>

### 大江健三郎

鶴見さんという方は、明治以来の100年、インテリがどういう役割を果たしてきたかということ、明瞭で強い論文でお書きになった方、というのが私の最初の印象でした。ところが、実際に鶴見さんとお会いすることができるようになり、実に多面的な考え方や経験をもってられ、そのことを非常に面白く、明確に表現される方だということがわかってまいりました。

そして、今日の皆さんのお話を聞き、文化について、人間について、あるいは歴史について、非常に多面的な要素をもって、それを生かして、深めてこられた方たちが集まって、鶴見さんという人物を囲う状態があったのではないかと、そして現にあるのではないかという気持ちを抱いています。

この十数年、鶴見さんとお会いする機会が増え、そして今日ここでお話をする機会を得、講演会本題と同時に、「鶴見俊輔さんの志を受けついで」というサブタイトルが置かれていることに感銘を覚えています。

鶴見さんがお亡くなりになるわずか前、私は、岩波書店発行の『教育再定義への試み』という本を贈っていただきました。

この本は、非常に多面的に書かれています。たしかに教育について語られていますが、教育について語ることは人間についてこのように広く、深く考えていくことなのだということを実によく感じ取らせる本だと思います。

この本は、「教育とは何か」、「痛みによる定義」、「教育と反教育」といった魅力的なタイトルの4つの章があり、それらが不思議

議なくらい一つひとつ独立した考察を含んでいながら、相互に大きな響き合いを示しています。この本は実に鶴見俊輔が彼自身を語っており、鶴見俊輔の全体像がはっきりわかるものとなっています。

このように鶴見さんから本を贈ってもらったのは、私たちが九条の会でごいっしょしてきたせいでもあります。そこで鶴見さんはあまり自分のお話をなさらなかった。しかし、それにもかかわらず、実にはっきりと自分自身を表現していられた。そして実は鶴見さんの人間観の中に特別に新しい女性像があるという感じを私はもっておりました。そして、そこには実に多様に、日本の女性についての思想が含まれていることに私は感じいったわけです。

とくにこの本の最後の「自己教育の計画」の章は実にいい章であり、その文章を引用して、お話するのが今日の私の仕事ではないかと思えます。

そこでは、「死ぬことの準備までを自己教育とし、人間の絶滅までを見すえて自己教育の中に入れる。とすれば、もうもうろくの中にすでに踏みこんでいる私は、もうろくをくみこんで、今これからの自己教育の計画をたてることが必要だ」と書かれています。そして実際にこの本は、鶴見さんが死ぬことの準備までを自己教育とし、自分自身を教育することはどういうことかということを実に明瞭に書いています。

私は、これを読んだ人たちは、自分の自己教育の計画をたて、それがどう展開するかということをそれぞれに書いていただければありがたいと思えます。それは現代の日本の出版の世界で決して行われたことの

ない一人ひとりの人間の自己教育というものを具体的に示すことになるのではないかと思います。そういう思いを誘う本です。

次に「その自己教育の計画が、私の他に、参考になるかどうか、心もとないが」と言いつつ、「この全体を導く、考えはじめのときにおいた道しるべを、終わりに書く」といって、短い結論を出していられます。

一は、「くらしそのものは、くらしの意識より大きい」、「私自身のくらしは、私の考えをこえる重さをもつ」。そこには鶴見俊輔という特別な人物の暮らし、どのように生きていられるか、どのように死に向かってすすんでいられるのか、ということについて、人間の暮らしというものはこういうものだということがはっきり汲み取れるような形で書かれている。それがこの本から読み取ってほしいことです。

二番目に、「記録にのこるわずかな数の個人を越える偉大な個人が人間の総体にいる」、人間とはこういうものとして、こういう全体として、いまこの地球にいる。そして人間の総体が次第次第に表現されていって、私たちの人間の世界は終わるのではないか、というのが鶴見さんのお考えだと私は考えます。「人間の総体は、どんな偉大な個人より偉大である」という言葉は、個人の肖像を描く文学をずっとやってきた人間として、いまこの宇宙で、この世界で、人間の総体自体が減びるかもしれない。減びる方向に人間の文化があるし、社会が、政治が動いている。その時にあたって人間の個人の総体を越えて人間全体の偉大さを考える、という根本的な仕方です人間について、あるいは人間とは何かということについて、



考えられているのが鶴見さんです。

3番目は、「専門の思想家の仕事をかえる仕事が、専門の思想家外の人仕事にはある」と書かれています。これは鶴見さんのお仕事の多くの部分をすっきり言い表している言葉です。私たちは専門の思想家が仕事をして、専門の思想家とはこういうもの、人間の思想とはこういうものだとして描かれているものを読んできたわけですが、しかし専門の思想家の仕事を超える仕事が、専門の思想家外の人仕事にある、教育専門家以外の人たちによって大切な教育がこれまでなされてきたし、今もなされている。この短い文章の中に、人間の総体と、人間の個人の3者に対する微妙な意義づけがおこなわれていると思います。

これら3つの定義が正しいかどうか実証することはできない。しかし、いまあげたような人間の総体、人間個人という考え方を捨てる必要はないと自分は思っている。このようにして人間の総体を考えていこうではないか、というのがこの本の主題です。

こういう考え方をもった思想家が人間について考えていられる。それを私たちが受け止めて、自分自身が人間というものを総体としてとらえてみる、この世紀はどういう人間を総体として作りあげたのか、それがどのような方向にすすんでいるのか、滅びようとしているのか。そのことを考えることが必要だということを鶴見さんはお書きになってこの本を終えられている。

人間には、人間というものの全体像について、それがどういう本質のものかをまっすぐ考えていこうという人がいる。そうい

う人の考え方をたどっていくことで、人類がどのように今にいたっているか、賢明だったはずの人類が、人類自体を滅ぼしてしまう方向にいつてしまおうとしていることを、私たちは認識し直すことができる。

そういうときに、否、人間の総体は滅びてはならない。それを今、自分が、自分個人の仕事を通じて、あるいは自分と同時代に生きる人を通じて示していくことが私たちの文学、文化の仕事なのだ。それをやっている以上、人間が今陥っている、本当に滅びるかもしれないということを考えざるを得ないような事態——核問題や、すべての国のなかで決して和解できないでいる国々の問題が、人間全体の運命を表現してしまうかもしれない危機があるときですが、根本的に人間は滅びてはならない、人間の総体とはこういうもので、これは人間がしっかりした達成を経て、この苦難から抜け出すことができる。そのためには大きい規模で人間の教育を考えなければならない、それが今だと鶴見さんはお考えになった。

それを考えて、自分と自分の後の人類も含めて、その全体像を自分でつくってみるということに私たちは努力しなければならない。それが今、もっとも人間にとって必要な仕事なんだということをお書きになっている。

これが、鶴見さんの最後のお仕事でした。それに向かって、自分の仕事、自分の勉強、自分の努力をそそいでみようではないか。そういう根本的な勇気を私たちに与えてくださる人として、鶴見俊輔さんがいられた。それを継いでいきたいと私は考えております。